

原 著

## ベトナム伝統音楽の楽器を使った鑑賞と体験学習

### —ベトナムの楽器トゥルン—

福永喜史 (岡山大学大学院教育学研究科)

学校音楽教育における中学校学習指導要領の第1学年内容B鑑賞には、「我が国の音楽及び世界の諸民族の音楽における楽器の音色や奏法と歌唱表現の特徴から音楽の多様性を感じ取って聴くこと。」(文部省1998:12)とされている。本論文では、鑑賞教育と共に、体験学習をするために、ベトナムの伝統的楽器を使った場合について考えていく。授業でより目標に対し、有効な楽器を選択するために、平野地帯を代表する楽器「ダンバウ」、中部山岳地帯タイグエンの楽器の代表である「トゥルン」「クローンブット」の3つの楽器を比較し、検討していく。また、授業で使うことができるベトナムの曲の選択や実践方法を示す。

キーワード：ベトナム、伝統音楽、体験学習、トゥルン、教育

#### I. 研究目的

現在、学習指導要領には、「我が国の音楽及び世界の諸民族の音楽における楽器の音色や奏法と歌唱表現の特徴から音楽の多様性を感じ取って聴くこと。」(文部省1998:12)とされている。この文章から、授業の実践方法を導き出すのは容易ではない。諸民族の音楽の知識が少ない教員には、民族音楽の取り扱い方がわからない。現状は、ビデオやCDのみを使った鑑賞を中心に行っている。体験学習を取り入れるケースは多くない。なぜなら、諸外国の楽器の実践を授業で取り入れる場合には、数々の問題があるからだ。例えば、楽器を手に入れなくてはならないという問題である。この場合、代用楽器を使うとか、楽器自体を日本の素材で手作り楽器を作ってみるという解決方法がある。しかし、取り扱う民族の楽器の特性を知っていなければ、代用楽器を見つけ出すことさえできない。手作り楽器を作った場合も同じである。次に、楽器を生徒に教えたり、楽器のことを説明したりする知識がないということが問題である。これは、教員自身に民族音楽の勉強をする時間がないためという。外部の民族音楽の専門家を呼んで授業を行うという方法もあるが、そのために必要な経費がないという問題もある。これらの問題のため、現在のようにCDを聴かせるだけが中心の授業を行うことも仕方のないことであると考えてしまいがちである。鑑賞は、その曲のバックグラウンド、つまりコンテキストを話すことで文化や音楽を知ることができる。コンテキストを話さないで授業を行ってしまえば、その授業が、ただの民族音楽というテ

キスト紹介になってしまう可能性がある。系統的な授業を考えた場合でも、テキストを提示するだけではなく、コンテキストを教える必要がある。鑑賞でコンテキストを知ることによって実体験を通して深めることができる。コンテキストを教える授業を行うためには、やはりある程度教員には知識、理解が必要である。

体験学習は、実際の楽器が目前にあれば、生徒の興味の深さも変わってくる。生徒が楽器に触れることで、視覚的にも理解することができると考えられる。1つの国の民族音楽でも、体験学習をし、楽器に触れることで、理解することができれば、その後、他の国の民族音楽を扱うときにも、理解した国との比較をしながら学んでいくことができる。それが、より深く理解することになるのである。もちろん、すべての民族音楽について教員が理解し、実践に持っていくのは、前にも述べたように数多くの諸事情のため不可能である。そこで、本論文において、鑑賞と体験学習を兼ねそろえた民族音楽の授業の方法を考えていく。そして、よりよい音楽教育の推進を目的としている。

#### II. ベトナムの音楽文化のあらまし

ベトナムの音楽は大きく2つに分けられる。1つは、ベトナムの平野地帯に住むキン族の間で伝わる音楽である。ベトナムでは、「莫塵の音楽」と呼ばれる音楽である。もともとは宮廷の音楽だったものが、民衆に広まったと言われている。平野での代表的な楽器は、ダンバウ(一弦琴)や、ダンキン(弾琴)、ダングエット(月

琴) などである。弦楽器が中心であることが特徴である。キン族の楽器は、装飾がされていることが多く華やかであるということも特徴のひとつであろう。

もう1つは、山岳地帯の少数民族で伝わる音楽である。ここで使われる音楽は竹の楽器が多いことが特徴である。代表的な楽器は、トゥルン (竹琴)、クローンブット (一種の気鳴楽器)、セインスア (搔奏竹) などである。楽器に装飾などはしてなく、竹を切ったり紐などによってつなぎ合わせたりすることで形にしている。竹が腐ることや、虫がつくことを避けるため薫燻している。竹の楽器で有名な場所は、中部山岳地帯のタイグエンである。

このように分かれていることには理由がある。それは、キン族と山岳地帯の少数民族の暮らしの違いである。前者も後者も、農業が中心である。しかし、前者のキン族の農業は平野の農地であるために、作業を強いられることはなく、緩やかな時間の中で過ごしている。その中で生まれた音楽がキン族の音楽である。楽器の音やメロディを聞いてみると、滑らかな音が特徴であることに気付く。それに対し後者の少数民族は、山岳地帯に住む民族である。かつて、山岳地帯の生活は、日々獣と戦い、気温や天気の変化も激しいため過酷な生活であった。家は高床式で、寝ているときに獣に襲われないようになっている。その中で生活する少数民族の音楽は、力強く、

鋭い音楽である。楽器の音が強く、遠くまでよく響く。山岳地帯では、隣家が近くではない。隣家に自分の家の冠婚葬祭を伝えるときは、楽器を使って大きな音で隣家まで届くように演奏する。こうして生まれたものが山岳地帯の楽器である。

この2者を比べてみると分かるように、生活習慣や生活スタイル、そして生活環境もまったく違う。だから、それぞれの場所から生まれた楽器の特徴がまったく違うということも頷くことができる。

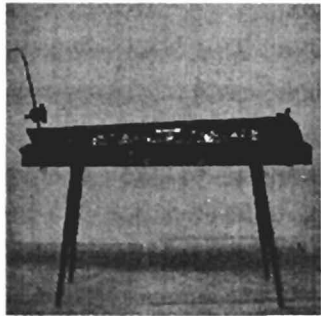


### Ⅲ. 楽器選択の理由

楽器を選択する上で必要なことは、鑑賞用教材としても、体験学習用教材としても適しているということである。ここでは、どの楽器を扱うべきかを導き出すために、ベトナムでポピュラーな楽器であることと、私自身がベトナムで購入して現在日本にあるということを考慮して、ダンバウ、トゥルン、クローンブットの3つの楽器を比較していく。

#### ① 鑑賞教材として

それぞれの楽器が、鑑賞の授業に適しているか、否かを導き出すために、各項目に分けて比較していく。

表1 鑑賞用楽器比較

	ダンバウ (弦鳴楽器)	トゥルン (体鳴楽器)	クローンブット (気鳴楽器)
形態			
音色	滑らかな音が特徴。日本では耳にすることができない音色である。	竹で作られているため、硬い音が出る。奏法によって音が変わる。時に柔らかくときに強い音が出る。	竹の中に空気を送り込むことによって音を出すため、日本では耳にすることができない音色が出る。
演奏技法	非常に難しい。弦が一本のため、すべてハーモニクスによって発音する。演奏を見ただけでは、技法の理解は難しい。しかし、日本	ダンバウに比べれば、奏法が簡単である。手の動きも映像の中である程度把握することが可能。	技法の種類が1つしかないため理解しやすい。しかし、視覚的な変化が乏しい。

	の楽器では想像できないような技法が多くあるため見栄えする。		
鑑賞の楽曲	ベトナムの民謡、童謡をよく弾く。その中で鑑賞に適している曲が多くある。ダンバウのために書かれた難易度が高い芸術的な曲も多く存在する。	中部山岳地帯タイグエンの伝統的音楽が多くある。また、伝統的な曲を現代風にアレンジしたものも多く、一曲の中で多くの技法が駆使されているため、演奏風景に見応えがある。	ソロで演奏する曲が非常に少ない。合奏で使われている場合、クローンプットの音を聞き取ることが難しい。
音源	ベトナムを代表する楽器であるため、CDの音源は多い。また、日本でも出されている教材用ビデオにも収録されている。さらに、ベトナムで福永自身が撮影したものも鑑賞教材として使うことができる。映像の使用に関しては奏者の許可を取っている。	ベトナムで福永自身が撮影したものを鑑賞教材として使うことができる。映像の使用に関しては奏者の許可を取っている。また、ベトナムで多くの曲が収録されているCDがある。	ベトナムで福永自身が撮影したものを鑑賞教材として使うことができる。映像の使用に関しては奏者の許可を取っている。

3つの楽器それぞれが、日本では聴くことができない音色を持っているため、生徒が音に興味を持つと考えられる。技法についても、それぞれの楽器が変わった奏法であるため、面白みもある。

ダンバウは、多くの曲があり、音源も映像、CDと揃っているといえる。映像は演奏技法多様で一曲の中でも技法がめまぐるしく使われているため、奏者の動きや楽器の使い方を見ることはできる。それを見て、楽曲の美しさや楽曲構成を知ることができる。

トゥルンは、ダンバウのように民謡、童謡などを演奏するということが少ないため、ダンバウに比べると曲数は少ない。しかし、発祥の地とされているタイグエンの伝統の曲を、キン族の芸術家が芸術的にアレンジした曲は多く存在する。また、指先を使う楽器ではなく、手を使う楽器であり、さらに、大きな楽器であるため、素人

目にも視覚的に捕らえやすいという利点がある。

クローンプットは、まず曲数が少ないということが問題である。奏法が1つで、技法も少ないため、ソロとしての曲が非常に少なく、アンサンブルでの伴奏や二重奏で使われることが多い。鑑賞で活用できるメディアが手に入りにくい。

以上のように3つの楽器を比較した結果、鑑賞教材には、メディアの活用のしやすさと曲数の豊富さ、興味を引く技法から、ダンバウとトゥルンが適しているといえる。

#### ②体験学習教材として

それぞれの楽器が、体験学習の授業に適しているか、否かを導き出すために、各項目に分けて比較していく。

表2 体験学習用楽器比較

	ダンバウ	トゥルン	クローンプット
演奏技法	非常に難しい。1つの音を出すためにも、多くの鍛錬が必要。さらに多くの演奏技法があることも難しさの1つである。	音を出すことに関しては簡単である。多くの技法が存在する。桴の種類が、簡単に演奏できるものと、多くの技法を伴うため上級者用の2種類があるため生徒の出来具合に対応していくことが可能。	珍しい奏法であるため、音を出すことは、簡単ではない。

<p>楽器の有無 (数量や撥の問題)</p> <p>・楽器の貸出し ・楽器の購入</p>	<p>簡単に手に入れることは、難しい。福永の所蔵は、1つある。使われる撥は、竹製の小さいもののため、日本でも作ることが可能である。</p> <p>楽器の貸出しについては、日本での楽器所有者が非常に少ないため難しい。</p> <p>骨董屋などで、売っていることがあるが、楽器として使用できるとは限らない。</p>	<p>簡単に手に入れることは、難しい。福永の所蔵は、1つある。上記の、簡単に演奏することができる桴が1本と、上級者用の桴が2本ある。</p> <p>簡単に演奏することができる桴は、マリンバのマレットと類似しているため代用することも可能。</p> <p>楽器の貸出しについては、日本での楽器所有者が非常に少ないため難しい。</p>	<p>簡単に手に入れることは、難しい。福永の所蔵は、1つある。</p> <p>日本で同じ形の楽器を作ったという事例もある。</p> <p>撥などは使わず、手を使って演奏するため、桴は必要ない。</p> <p>楽器の貸出しについては、日本での楽器所有者が非常に少ないため難しい。</p>
<p>楽譜の有無</p>	<p>伝統的な楽曲には楽譜はない。しかし、現代になり、伝統を途切れさせないために五線譜で書かれている。ダンバウで演奏される童謡、民謡は、五線譜になっているものは多い。</p>	<p>伝統的な楽曲には楽譜はない。しかし、伝統を途切れさせないために五線譜で書かれるようになった。口承されてきたため、現在、五線譜になっている曲は少ない。</p>	<p>伝統的なものには存在しない。しかし、伝統を途切れさせないために五線譜で書かれるようになった。口承されてきたため、五線譜になっている曲は少ない。本来は即興的に演奏されるものであったといわれている。</p>
<p>体験させるための楽曲</p>	<p>曲は、簡単なものから難しいものまで揃っている。体験させることに相応しいと思われる旋律がとらえやすく短い曲も多くある。</p>	<p>1曲が長い。しかし、1曲の中で簡単なフレーズと難しいフレーズがあり、フレーズ間がはっきりしているため、曲の一部を取り上げて授業で使うことが可能。</p>	<p>1つのフレーズが短く、分かれているため、曲の一部を取り上げて授業で使うことが可能。</p>

ダンバウは、奏法が非常に難しく、音を出すことにも苦勞することが考えられる。面白みよりも難しさが先行してしまい、楽しむところまで行かない。曲を体験させるところまで、到達できない。

トゥルンは、奏法が比較的簡単であり、誰でも音を出すことができる。練習次第で特殊な技法も会得することが可能である。さらに、1つの曲の中に、多くのフレーズが出てくるため、曲の中の難しい部分と簡単な部分を生徒の実態に合わせて選び体験させることも可能である。また、簡単に演奏できる撥は、マリンバなどのマレットの形に類似しているため代用でき、生徒1人につき1本、または、グループで2本は、用意することができると考える。例えば、紙に書いたトゥルンの実寸の図を、あらかじめ用意しておくことで、楽器に触れない間も、それを利用して練習することができる。トゥルンの音列は、後述するようにピアノや木琴鉄琴類などの普段生徒が目にするのできる楽器の音列とはまったく違うものであることから、トゥルンという楽器を知ることが、西洋音楽との違いに気付き、異文化理解をすることがで

きる。

クローンブットは、奏法が掌を使って音を出すという、非常に珍しい奏法であるため、生徒たちにとって、面白みがあると考えられる。しかも、コツさえつかめば、誰でも演奏することができる楽器である。扱う曲については、伝統的な曲でも、簡単な部分を取り上げたり、編曲したりして扱うことができる。また、日本の竹でも同じ奏法で音を出すことができるため、音階作ことは難しいが、発音の仕組みにおいて、代用楽器を使うこともできる。

以上のように、3つの楽器を体験学習用の楽器として考えながら比較した結果、体験学習において扱う楽曲の適正や、奏法の難易度の問題から、トゥルンとクローンブットが適しているといえる。

このように、鑑賞教材と体験学習教材の双方の視点で、比較してきた結果、鑑賞としては、楽曲の豊富さからダンバウとトゥルンが適切であった。体験学習では、奏法と体験用の楽曲の有無から、トゥルンとクローンブット

が適切であるということが分かった。鑑賞教材と体験学習教材の両方で有効な楽器はトゥルンであることが分かった。よって、本論文では中部山岳地帯タイグエンの楽器である「トゥルン」を使った授業の方法論を考察していく。

#### IV. 楽器の説明

ここでは、トゥルンの特性を紹介する。

##### 1. 楽器名

トゥルン (*trung*)

##### 2. 地域名・民族名

ベトナム 中部山岳地帯(タイグエン) バナ族、エダ族

##### 3. 楽器の形・特徴

計44本の鍵盤で構成されている。楽器の形状は写真1のようになっている。鍵盤は輪ゴムを使って、紐に括り付けられ固定されている。鍵盤は高音になるほど細い竹を使用している。5音階でできている列が縦に3列になって構成されている楽器である。

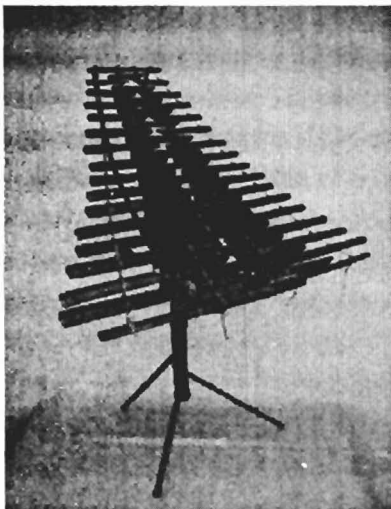


写真1 トゥルン

##### 4. 桴 クエ (*que*) について

桴には、現在のクエとオリジナルのクエの2種類がある。

素材 グリップ部分 竹製。

ヘッド部分 木製。さらに木製部分(鍵盤を打つ部分)には硬いゴムをつけている桴もある。このヘッド部分のことをダン クエ(*dan que*)と言う。

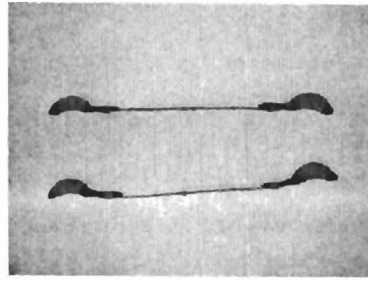


写真2 桴 (*que*)

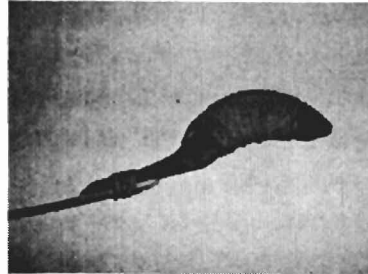


写真3 ダンクエ (*dan Que*)

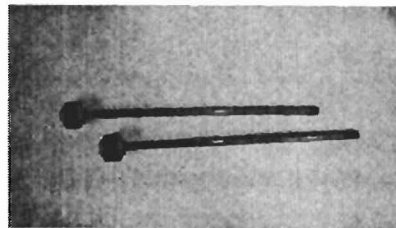


写真4 オリジナルの桴(*que*)の形

もう1つのトゥルンの桴は写真4のように上下にヘッドが付いているわけではなく、片方だけについていた。

##### 5. 演奏の姿勢

足は肩幅くらい開く。楽器が大きいため演奏しやすいように多少動いて演奏する。

ソロの場合、客席から演奏者の手がよく見えるように横を向いて構える。伴奏やアンサンブルをするときは、アンサンブルしやすいように、演奏者が舞台の中央を向いて構えることが多い。

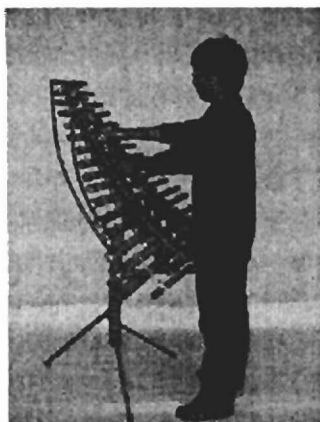


写真5 演奏姿勢

#### IV. ベトナム音楽の鑑賞

鑑賞では、2005年9月と2006年10月のベトナムのフィールドワークにおいて、録ってきたドゥ・チュイ・チ (Do Thuy Chi) 氏の演奏を利用する。曲は「ムア ハイ クワ」(Mua Hai Qua) である。この曲は、タイグエンの本来の音階H-D#-E-G#-A-Hという音階を元に、現代風にアレンジしたものである。

##### 1. 曲の説明

「Mua Hai Qua」は「果物を採る季節」という意味である。Muaは季節、Haiは摘む、Quaは果物という意味である。タイグエンの自然を描写した部分が多くあり、様々な技法が駆使して表現されている。演奏時間は、7分。

##### 2. 曲の選択理由

生徒たちにとって、トゥルンは、深く触れたことのないものであるから、はじめの印象が重要になってくる。では、どんなものが印象深く心に残るのであろうか。それはまず、メロディが、記憶に残りやすいということである。曲の選択次第で、全体の印象が悪くなってしまう可能性があるため、メロディが聴き取れるということは重要である。ここで使う「ムア ハイ クワ」は、旋律がはっきりしている。

次に、印象深く心に残るための重要な要素として、曲がダイナミックであるということである。あまりにも静かで、盛り上がりがない曲だと印象が弱い。生徒が、曲を聴く中で、ダイナミクスを感じることで、印象が深くなり、楽しむことができると考えられる。さらに、短

い曲であり過ぎないということである。それは、あまりにも短い曲であると、印象を持つ前に、曲が終わってしまうという恐れがあるからである。逆に曲が長すぎても飽きてしまうということが考えられるので、選曲は慎重に行う必要がある。「ムア ハイ クワ」は、タイグエンに伝わる民間伝承のままであると、単純かつ、短い曲である。それを、芸術家が、芸術的に優れているものに編曲した曲である。そんな「ムア ハイ クワ」は、曲の中で幾つもの部分に分かれている。たとえば、季節の到来を表している部分、果物を採っている様子を表している部分、タイグエンの自然を描写している部分などである。それぞれが特徴を持っており、それぞれ面白みがある。ダイナミックでもあるため、生徒たちが楽しむことができると考えられるのでこの曲を選んだ。

##### 3. 目標

鑑賞の目標を、次の2つに設定する。

- ①. トゥルンの音色を聴き、日本にはない音を感じる。
- ②. 演奏方法を見て興味を持つ。

まず、鑑賞全体を通して、日本では聴かない音ということに気づき、興味を持つということを目標に定める。ベトナムの竹は、日本のものと比較すると薄いため、叩いたときに出る音が違う。曲を聴かせることで、なぜこんな音が出るのか、使われている技法は何を描写しているのかを、感じる必要がある。さらに、楽器の説明をすることで、生徒が自発的に楽器に触ってみたい、演奏してみたいという気持ちになり、体験学習に、生徒自らがつなげていくことができることもねらいである。そのために、始めに、ベトナムのトゥルン演奏家であるドゥ・チュイ・チ氏が演奏している映像を観せる。その後で、私自身が、トゥルンを生徒の前で生演奏する。私はアウトサイダーではあるが、ドゥ・チュイ・チ氏に直接指導を受け、曲を演奏することができる。またプロの演奏家が選んだ楽器を入手している。生徒たちに映像だけでなく、生の音を聴かせるということが、生徒の興味の深さとなるため非常に有意義なことであると考えられるからである。

##### 4. 楽譜

この楽譜は、ヒュー・スワンが作曲したものをベトナムの伝統音楽研究家ロイ氏が採譜したものである。

## Mùa Hái Quả

Buu xuan

## V. ベトナム音楽の体験学習

体験学習では、実際に楽器を演奏することによって、より深い理解を促すと共に、生徒自ら楽しむことを目標にしている。さらに、そのトゥルンとそれ以外の世界の民族音楽を、比較しながら学習していくことができるような視点を身につけるとすることも目標としている。

## 1. 曲の説明

体験学習で扱う曲は「ティエン チャイ チェン サック ボーボー」(Tieng Chay Tren Soc BoBo) という曲である。「米作りの様子」という意味である。この曲は、「モア ハイ クワ」のように芸術家が編曲したものではなく、タイグエンの民間伝承そのままの曲である。Tiengは音, Chayは杵, Trenは上, Socは旧暦の一日, 北方, BoBoはしっかりと抱きしめるという意味。演奏時間は6分。

## 2. 曲の選択理由

体験学習で使う「ティエン チャイ チェン サック ボーボー」の難易度は、多くのトゥルンの曲の中でも、中級である。体験学習で扱う曲として必要なことは、まず、生徒が演奏できる程度の曲であるということである。しかし、ここで問題となるのが、生徒によって音楽能力が個々によって異なるということである。生徒の中には、個人的にピアノを習っていて、音楽に慣れている生徒がいると考えられる。ピアノを習っていない生徒でも、普段からギターを弾いている生徒もいるであろう。このように、普段から楽譜に慣れ親しんでいる生徒にとっては、楽譜を読むことに対する抵抗が低いものと考えられる。しかし、普段から音楽に慣れ親しむことがなく、音楽が不得意であったり、苦手であったりする生徒にとって、体験学習は酷なものになってしまう。それが、一番大きな問題点となる。この「ティエン チャイ チェン サ

「クボーボー」は、8小節から16小節の小さなフレーズが集合して1曲として成り立っている。1フレーズだけを取り出して演奏しても、違和感は少ない。それは、それぞれのフレーズで終止されているからである。この曲の特性を活かし体験学習で使うことができる。例えば、音楽が苦手な生徒は、始めの14小節を演奏すればよい。また、音楽が比較得意で、楽譜を早く読むことができる生徒については、第98小節から最後までが難しいため、この部分を体験学習に使えばよい。また、生徒が長いフレーズをやりたいと希望をしたり、授業者が、より難しいフレーズを挑戦させたいと思ったりしたときには、長いフレーズを選択し、演奏させることができる。ここでもう1つ問題が浮かび上がる。それは、楽譜がまったく読めない生徒についてどうするかである。実は、トゥルンは、ベトナムでは楽譜を使わずに教えるものである。私が、フィードワークでレッスンを受けてきたときも、楽譜を使わなかった。口承で、授業を進めた場合でも、十分に生徒が対応できる程度のレベルの曲なのである。

以上の点からこのティエン チャイ チェン サック ボーボーを選曲した。

### 3. 目標

体験学習の目標を、次の2つに設定する。

- ①. 体験学習を通して、トゥルンの特性や音色を感じることができる。
- ②. 興味を持って楽しみながら、演奏することができる。

この体験学習は、日本の楽器にはない音色を、自分で実際に出すことによって、音色の違いを認識することができる。この体験を通して、他の国々には、どんな楽器があるのか、今まで行ったベトナム以外の国の音楽が、どのような形であったかをトゥルンと比較しながら考えられる力をつけたい。それは、比較対象があれば、基準を定められるため、他の国の音楽にも興味を持つと考えられるからである。

### 4. 楽譜

グエン・ハムが作曲した。ドゥ・チュイ・チ氏の演奏VTRを福永が採譜した楽譜。

#### Tiếng Chày Thên Sóc BoBo

作曲 Nguyen Homs

採譜 福永喜史

Musical score for the first part of the piece, measures 1 to 49. The score is written in treble clef with a key signature of one sharp (F#) and a 2/4 time signature. It consists of six staves of music, each starting with a measure number: 1, 9, 17, 25, 33, and 41. The notation includes various rhythmic values and rests.

Musical score for the second part of the piece, measures 57 to 111. The score is written in treble clef with a key signature of one sharp (F#) and a 2/4 time signature. It consists of six staves of music, each starting with a measure number: 57, 66, 75, 84, 93, and 102. The notation includes various rhythmic values and rests.



## VI. おわりに

このように、トゥルンを使えば、鑑賞と体験学習の双方を兼ねそろえた授業をすることができる。映像を観て終わってしまう授業よりも、本物を目で見るということは、異文化理解の上で重要なことであると考えられる。しかも、トゥルンは、ピアノの鍵盤と音列が異なっている。普段、音楽教育の中で鍵盤といえばピアノの形と音列を想像してしまう生徒たちにとって、非常に珍しい楽器である。その音列に難しさと面白みがあると考えられることでもある。音列からも異文化理解をすることができるのである。また、トゥルンの桴は1本につきヘッドが2つ付いているため、楽器1つから、最多で4つの音を同時に出せるという特徴を持っている。これは、単音しか出すことのできない西洋の管楽器と違い、ソロで演奏したときも聴き応えがある。2つのヘッドを使い1オクターブのトリルが容易にできるように、楽器が湾曲しているということもこの楽器の特徴である。芸術性の高い曲を弾いたり、現代の音楽の多様性に対応したりするために桴と楽器を改良したのである。しかし、伝統を崩さないように、元来の楽器の良さをさらに伸ばすような改良の仕方である。これは、音楽に対する高い文化を持っていると言える。ほかの国にはない考え方や、音楽文化を、トゥルンを通して感じることができるのである。

トゥルンは大きな楽器であるが、組み立て式になっているため分解しケースにしまうことで持ち運びが簡単にできる。高等学校や養護学校でトゥルンの依頼演奏や授業を私が行ったときも、車を使わずに公共の交通機関を使って行くことができた。楽器を持つての移動が簡単にできるという点は、発表会などにも適している。

しかし、学校教育現場で起こっている問題が、トゥルンの授業を行う上でもっとも大きな問題となる。それは、楽器が少ないということである。今回の授業でも、全員で同時に弾くことは不可能である。このままでは、一人ひとりが、じっくり楽器に取り組む時間はない。その問題を解決するための方法は、先にも述べたように、1クラスを4人から5人のグループに分け、模造紙などに、実寸のトゥルンの鍵盤を書き、楽器を触れない間は、その図で練習するという方法である。桴は、マリンバのマレットと似ている形状のものがあるため、マリンバ用マ

レットであれば代用でき、一人1つずつはなくても、グループに1本もしくは、2本いきわたると考えられる。生徒の能力に合わせてグループを分けることでお互い教えあい協力して活動することができる。

楽器をそろえるためには、一般の学校の音楽教育に世界の民族音楽の生の音を聞かせるために、教員養成課程を持っている大学が、楽器を買うべきであると考えられる。大学が地域のセンターとなり、音楽教育の充実を図るべきである。その理由として、1、大学には置き場所があること。2、楽器を購入するための経費が現場の一般学校にはないということ。3、大学で教員養成を行う上で有効であるということがあげられる。トゥルンは、現地の値段で1体約15,000円である、授業を行う上で、グループ分けをして、一クラス4つは必要と考えても、コストは60,000円で済む。ガムランなどは、楽器一体が高価なため、授業用に簡単に買うのは難しい。大学が楽器を所蔵し、一般に貸出しすれば、授業で体験学習を兼ねた民族音楽を、取り扱うことが可能になる。また、教員養成課程で、民族音楽の授業例などを、学生が学習することで、教員になったときも有効な能力として生きてくる。

現在の音楽教育の中の1つの問題である、民族音楽の授業をよりよいものにするために、各大学が民族楽器を購入し地域の学校のために所蔵しておくことを提言する。

## 引用・参考文献

- 1) 文部省 中学校学習指導要領 1998年12月
- 2) 開高健 『ベトナム戦記』朝日新聞社, 2004年
- 3) 中島貞夫 『音をかたちへ——ベトナム少数民族の芸能調査とその記録化』醍醐書房, 2006年

---

Title : A Proposal for Teaching Vietnamese Traditional Instrument Music through Listening and playing activities.

Yoshifumi FUKUNAGA (Graduate School of Education, Okayama University)

Keyword : Vietnam, Traditional music, Education, Playing, *t'rung*

---